

人と都市の媒介物のデザインに関する研究 -「大きな本」を用いた実践を通して-

正会員 ○下林信夫^{*1} 同 鈴木毅^{*2} 同 松原茂樹^{*3} 同 木多道宏^{*4}

2.建築計画-5.設計計画-d.まちづくり（地域再生・都市再生）・コミュニティ計画

千里ニュータウン、まちづくりグッズ、記憶

1.研究の背景と目的

「人と都市の媒介物（人と都市（建築、人、ラン関係性をつくるもの））のデザイン手法としては大きく分けて、建築、ランドスケープなど「つくるデザイン」、コミュニティデザイン、ワークショップなど「つくらないデザイン」、そしてそれらの「中間的性質のデザイン」があり、その中で中間的性質のデザインはあまり一般的にデザインの対象とされておらず、その重要性、可能性について考える必要がある。本研究では、中間的性質の「人と都市の媒介物」のデザインについて、その都市における重要性について「大きな本（図1.図2）」を用いた実践を通して明らかにすることを目的とする。



図1.千里ニュータウンでの展示



図2.中之島公園での展示

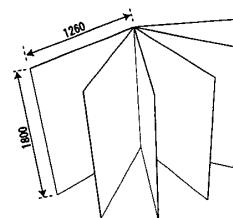


図3.「大きな本」サイズ

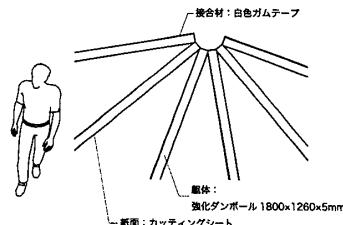


図4.部分詳細

2.「大きな本」プロジェクトについて

2.1.活動の主旨

「大きな本」は、まちびらき 50 年をむかえる千里ニュータウンの歴史と魅力を振り返り、共有するための媒介物を具体的に提案したプロジェクトである。現在、千里ニュータウンでは自分たちが住んでいる街はどういう意図で計画され、どのような暮らしの記があるのかが十分に継承、共有されないまま建て替えが進んでいる。何もしなければ失われてしまうかもしれない、住人にとって身近な記憶の中にも継承、共有されるべき情報は多くあるはずで、それらを都市空間の中で共有することが本プロジェクトの目的である。

2.2 これまでの活動について

2011年11月20日に豊中市新千里東町において行なわれた街歩きイベント「いにしえ街歩き東町昔遊びツアーハイウェイ」のために「大きな本」を制作したのが、このプロジェクトの始まりであった。地域の方から

● 2011年

10 「ひがしまち街角広場」にて第1回目の会合を行う
11 113-19 初版第一刷のコンテンツ制作及び製本期間
1120 いにしえ街歩き東町昔遊びツアーハイウェイで展示
1203 千里ふれあいフェスタで展示
1211 新千里東町クリスマスイベントで展示

● 2012年

0813 おおさかカンヴァス推進事業 2012 に選出される
0901 第二版第一刷のコンテンツ制作及び製本期間
1007 街角広場 11 周年の際に「大きな本」を展示
1008 街角広場での常設展示開始

1015-16 水都大阪 2012 の中之島での展示に出展

1026 「大きな本」新千里東町ツアーハイウェイ

1026 「みんなで読む・作る千里の「大きな本」」を開催

1102 読売新聞で大きな本が紹介される

1110 「大きな本」新千里東町ツアーハイウェイ

● 2013年

0301 府営新千里東住宅の旧集会所で展示
0405 千里文化センター内コラボ内のコラボ交流カフェで展示
0429-0506 本屋兼コミュニティカフェ「さたけん家」で展示
0510 千里文化センター内コラボでのナイトカフェで展示
0806-09 「大きな本」ワークショップを開催
0910-1110 千里ニュータウン情報館開館 1 周年記念企画展展示

図5.「大きな本」プロジェクトの活動年表

Design of Mediator between People and a City – Action Research of “Big Book”

SHIMOBAYASHI Nobuo, SUZUKI Takeshi, MATSUBARA Shigeki and KITA Michihiro

提供していただいた写真に加え、地域のマップなど、蓄積された地域の記録を1冊の本としてデザインした。2011年の段階では、クラフト紙で、1枚1260mm×1800mmの一般的な強度のダンボールを6枚組の本に組み、そこへプロッターでコンテンツを印刷した紙をスプレー糊で接着する方法で制作した。さらに、2012年には大阪府のおおさかカンヴァス推進事業の一貫として、7冊の大きな本を新たに制作し、千里ニュータウン及び中之島公園で展示した。その制作にあたっては、強化ダンボールをクラフト紙で組み、その上にコンテンツの印刷されたカッティングシートを貼付けるなど、2011年に制作したものから多少変更を加えた(図3,図4)。その後の、これら7冊の本を用いて行なってきた活動をまとめた年表を図5に記す。

2.3 大きな本の特徴

現在「大きな本」は全部で7冊あり、それぞれが罰のテーマで構成されている。テーマは、①都市の歩き方(図6左)、②千里ニュータウン新千里東町編(図6右)、③大きな本の説明書、④千里の今昔、⑤車止図鑑、⑥こどもにとっての東町、⑦千里の思い出の場所・欲しい場所、となっている。「大きな本」の特徴は次の3点である。

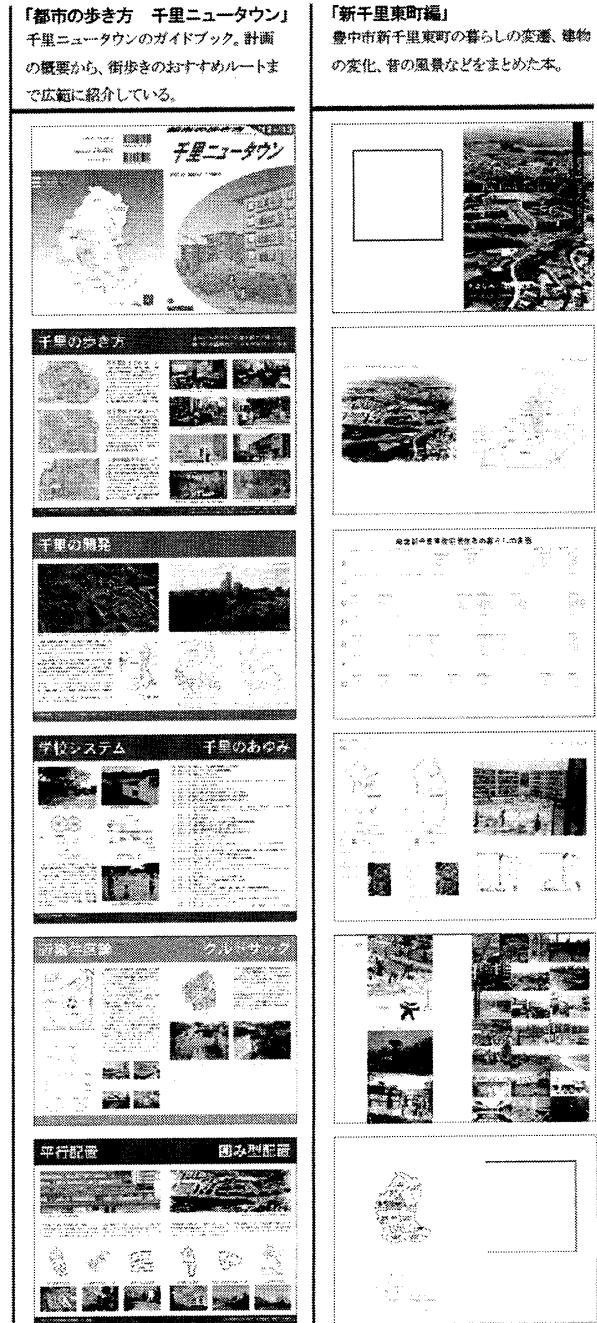
- 1)千里ニュータウンにおける身近な過去、現在の内容を紹介すること。
- 2)大勢で同時に1冊の本を読むことが可能である。
- 3)サイトスペシフィック性がある。例。団地の中で、その団地の昔の思い出を知ることができること。

3.調査の概要

調査の概要を表1に示す。

表1.調査概要

調査日時・場所	調査目的	調査項目
千里文化センター (2013/8/8/10:00-12:00)	「大きな本」が人に与える影響を、人と媒介物の関わり方から分析すること	マッピング調査 (図7) 展示空間を50cmグリッドに分割し、各グリッドに鑑賞者が静止した回数を動画から読み取り記入
千里文化センター(1回目:2013/8/7,8,2回目:2013/4/5)中之島公園 (2012/10/16)	「大きな本」が人に与える影響を、人と人、人と媒介物の関わり方から分析すること	画像調査 散力所で「大きな本」とその周辺画像を撮影する
千里ニュータウンプラザ2階 千里ニュータウン情報館(2013/11/10)	「大きな本」が人に与える影響を、鑑賞者の内面から	アンケート調査 鑑賞者に良いと思った内容をポストイットにその理由を記入し貼付けてもらう



4.鑑賞者の見方について

動画の読み取りからマッピング調査を行なった結果を図7に示す。さらに分析を進めるために、大きな本周辺を3つのエリアに分割し、各エリアと鑑賞者の静止した数の関係性の分析を行なった。図9及び図10は、「大きな本」の本ごと(図8b)に、内側のエリアと中間のエリア(図9)、中間のエリアと外側のエリア(図10)における鑑賞者の静止数をプロットした。図11及び図12は、同様にページごとでプロットしたものである。これらの相関関係をみると、本ごとには正の相関関係があり、ページごとは、ばらつきがあり無相関であるという結果になった。また、その原因として大きな本のレイアウト、ページごとの開いている角度などのハード面が考えられるが、それらとばらつきは関係性がないということがわかった。このことから、鑑賞者の見方(各ページに対して静止する位置)に各ページに含まれる内容が影響を与えている。つまり、鑑賞者と媒介物(「大きな本」)の間の相互関係から、見方が決定されると言うことが言える。これは、鑑賞者と「情報としての都市」が「大きな本」を介して関係を持っていることを意味する。

5.媒介物と人で形成される場の構造について

まず画像調査から得た125枚の画像それぞれについて、図13に定義する記号を用いた「場の構造式」を制作した。それらの構造は、①同一の事象に関わる人の数については3人以上を区別せず2人として表現する。②同一の媒介物周りに形成された2以上の同一の構造式を省略し1つとして表現する。という条件のもとで分類すると、図14に示す12の構造式に分類される。12のうち、画像から判別が容易な8項目(図14中の(1),(2),,(8))と、撮影された場所の関係を示したのが図15である。異なる日時に撮影された千里文化センター「コラボ」の2つの画像群は場の構造の分類項目の割合に類似性があるが、コラボと中之島では、割合に違いがあることが読み取れる。これは「媒介物」が場所のコンテクストと反応することで多様な異なる場の構造を形成し得ることを示している。さらに、マッピング調査で得られた動画を用い、「場の構造式」の分類結果の、それぞ

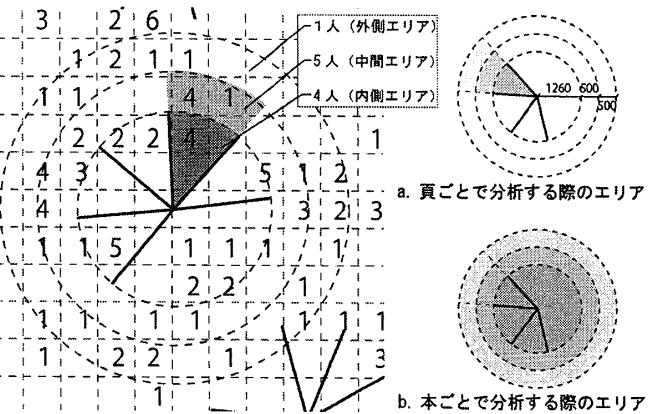


図8.分析に用いるエリア分けの方法

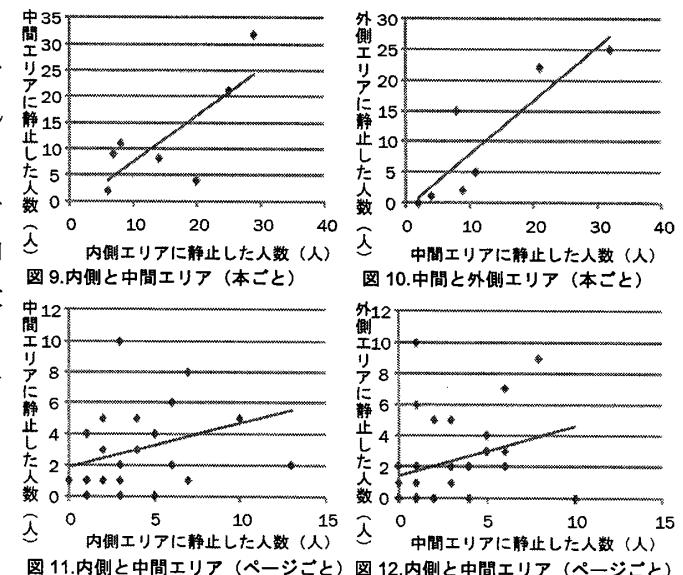


図9.内側と中間エリア(本ごと) 図10.中間と外側エリア(本ごと)

図11.内側と中間エリア(ページごと) 図12.内側と中間エリア(ページごと)

- 1) C : 関係性の媒介物 一人と人、人と情報を媒介する物。本研究では「大きな本」が媒介物となっている。
- 2) P1, P2, P3... : 人1, 人2, 人3... 媒介物または周囲の人と関わりをもつ人。
- 3) ——— : 1次的事象 話す、見るといった一連の出来事のきっかけとなるもの。
- 4) ——— : 2次的事象 1次的事象の結果として生じる出来事。
例) あるものを見て(1次)それについて他者と話す(2次)。
- 5) ○ : 領域 人や媒介物、又はその両者により形成される空間。

図13.「場の構造式」に用いる記号の定義

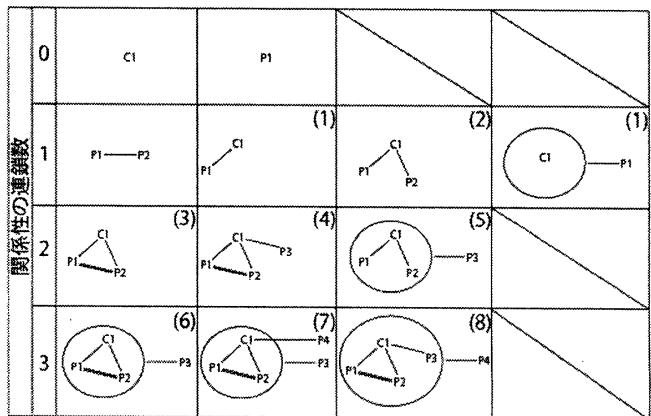


図14.「場の構造式」の分類結果

れの構造式を時系列順に結びつけた結果を図16に示す。これから図16中の「居合わせる(2)」状況が、さらに複雑な場を形成する始まりである点で重要であることを読み取れる。

6.住んでいる地域と見方の関係

アンケート調査より、回答者が住んでいる地域と、回答内容の関係性を分析した(図17)。分析に際しては、回答内容を6項目で分類している。分析結果から、千里の住民かそうでないかで、「大きな本」への反応の仕方が異なっていることが読み取れる。

7.研究のまとめと今後の課題

本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

- 1) 鑑賞者と「情報としての都市」が「大きな本(媒介物)」を介して関係を持っていること
- 2) 「居合わせる」状況がより複雑な人のつながり方の始まりであるという点で重要であること。
- 3) 中間的位置づけの「人と都市の媒介物」は、場所のコンテクストと反応することで多様な異なる場の構造を形成し得ること。

本研究により中間的性質の「人と都市の媒介物」は、日常にはない人のつながりを形成し、さらには都市との新たなつながりかたのきっかけとなる(図18)ため、都市のデザイン手法の一つとして重要なことを明らかにすることができた。

謝辞

本研究にあたり、ご協力頂きました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) W.H.ホワイト「都市という劇場—アメリカン・シティ・ライフの再発見」柿本照夫訳(日本経済新聞社、1994)
- 2) 鈴木毅他「都市の公的空間における「居方」の考察」学術講演梗概集.E, 建築計画, 農村計画 1992,719-720, 1992-08-01
- 3) 隅谷維子他「環境との関わり方からみた場所の意味とその構造に関する研究」日本建築学会近畿支部研究報告集.計画系(39),301-304,1999

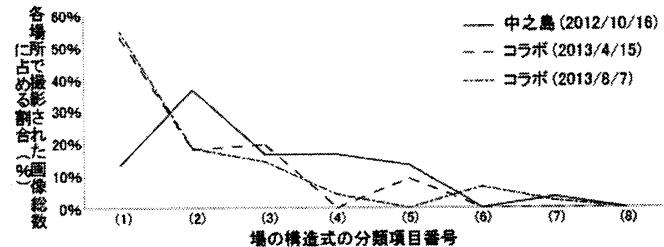


図15.撮影場所と「場の構造式」の分類の関係

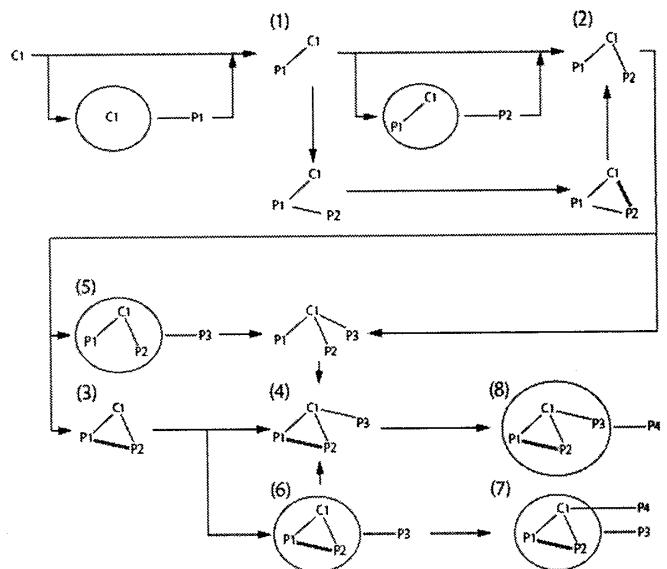


図16.場の構造式の変化のプロセス

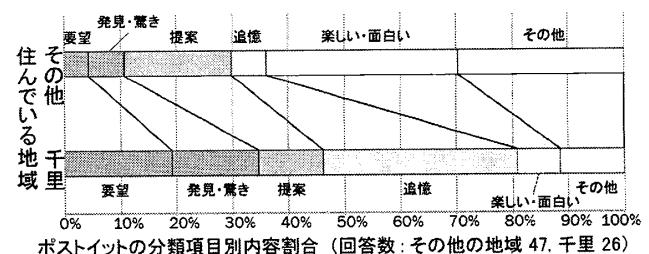
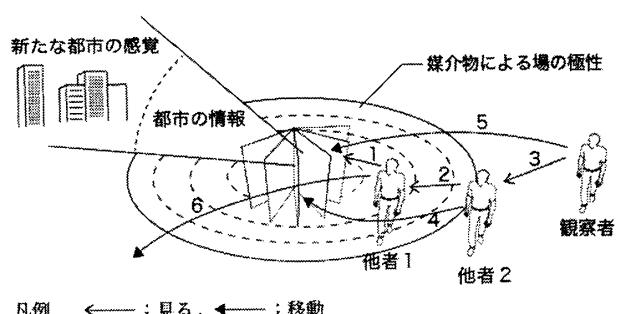


図17.回答者の住んでいる地域と回答内容の関係



凡例 ← : 見る, ← : 移動

図18.媒介物を介して他者及び都市と新たな関わりをもつ

*1大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 博士前期課程

*2大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 准教授・博士(工学)

*3大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 助教・博士(工学)

*4大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 教授・博士(工学)

Graduate Student, Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University
Assoc. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
Assis. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.